海の道むなかた館
令和５年度館長講座
「筑紫・豊（前）の四つの窓」

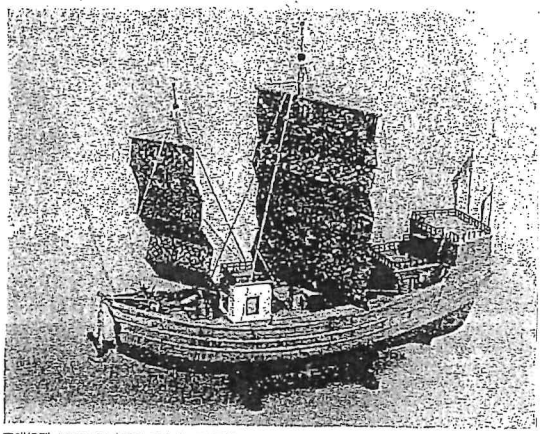
令和５年７月８日(土)

海の道むなかた館長　　西谷　正

第４回　Ⅰ.玄界灘・響灘（4）博多・津屋崎綱首の問題

Ⅰ　はじめに
綱首（綱司）とは
博多津鴻臚館から綱首（官貿易から住蕃貿易）へ

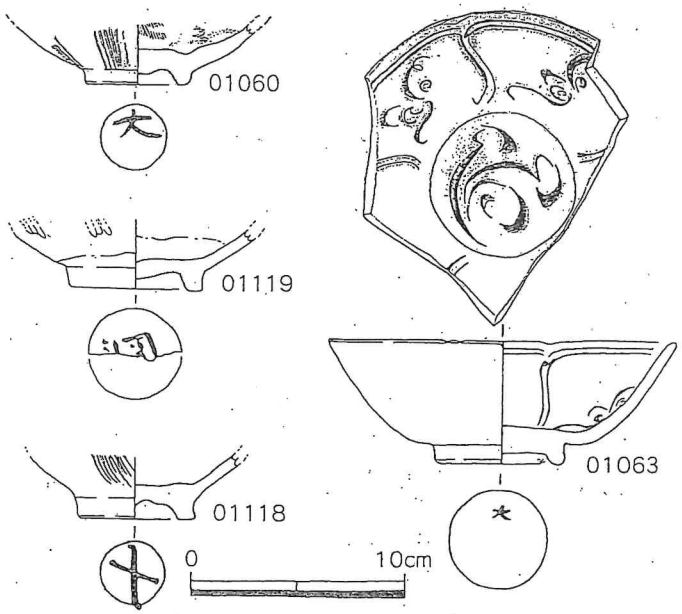
Ⅱ　宗像大社・阿弥陀経石・石造狛犬をめぐって


宋船模型／福岡市博物館所蔵／制作者：堀尾正博／福岡市博物館写真提供

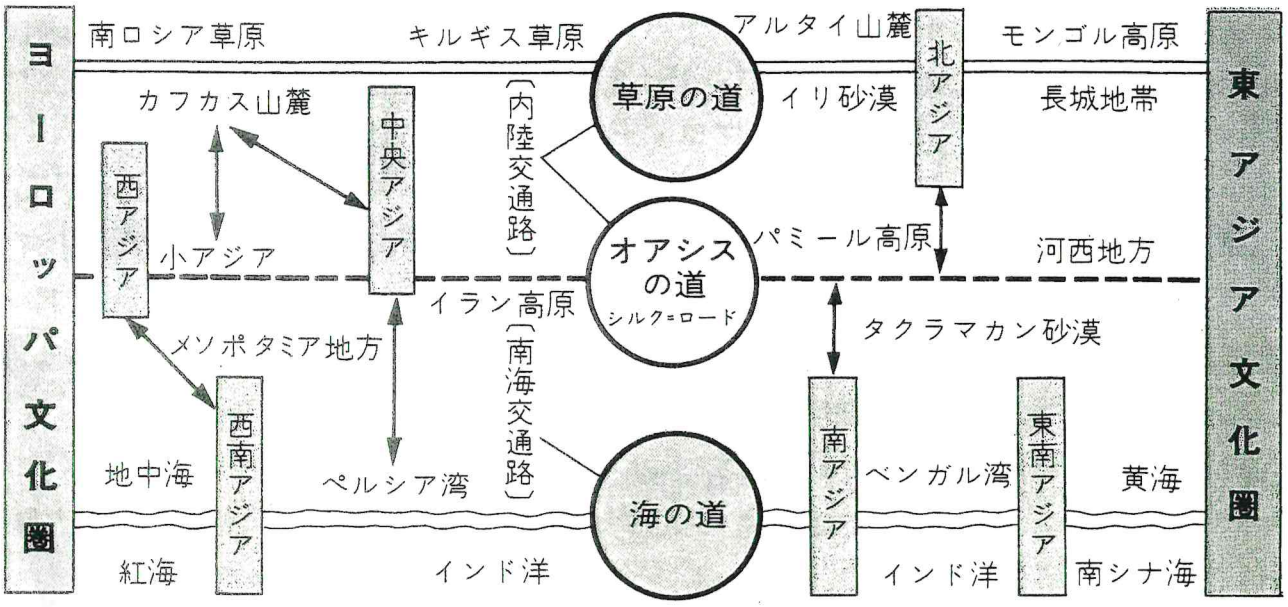
Ⅲ　交易拠点・唐坊の遺跡
博多遺跡群と津屋崎・在自西ノ後（あらじにしのあと）遺跡

Ⅳ　東シナ海を舞台とした交易活動
韓国・新安沈没船は語る

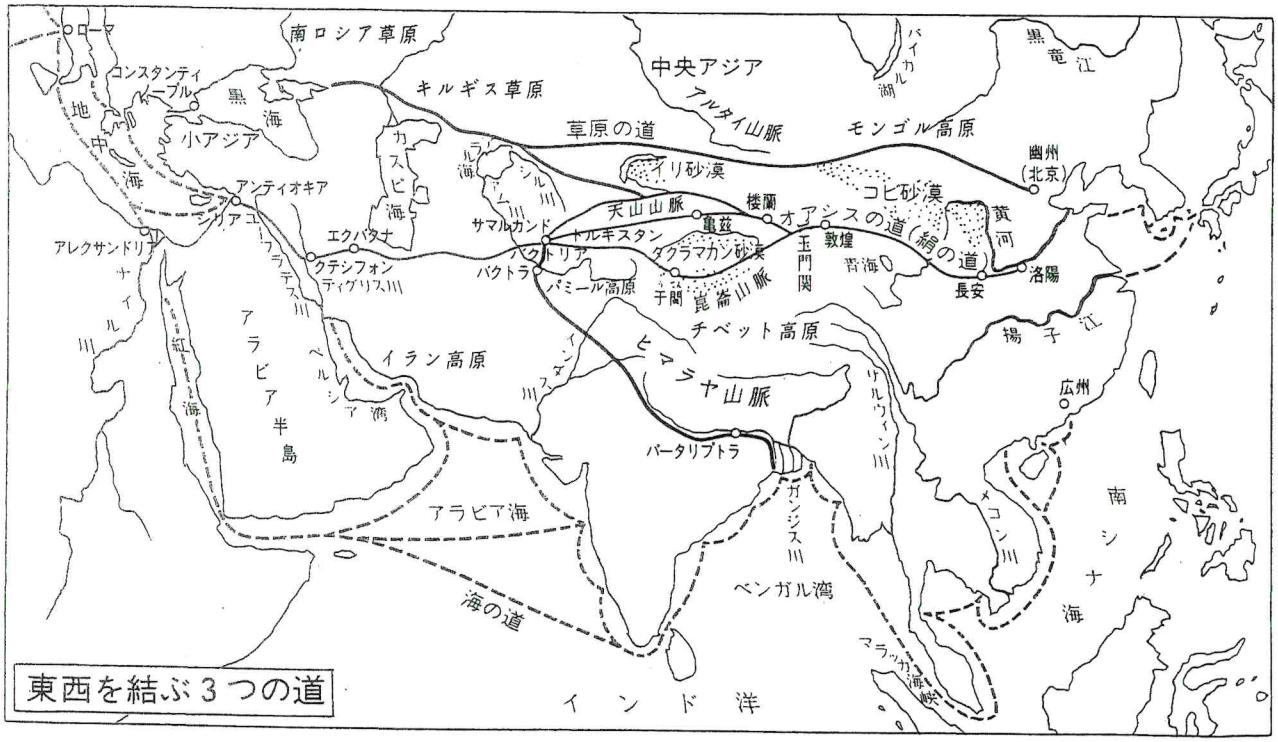
Ⅴ　おわりに
北東アジアから東南アジアへ



津屋崎・在自西ノ後遺跡
一次調査出土墨書磁器実測図(1/4)



コーチ これら3つの道のもつ歴史的な重要性は，それぞれ草原の道とオアシスの道はほぼ古代と中世，海の道は近世と現代にある。

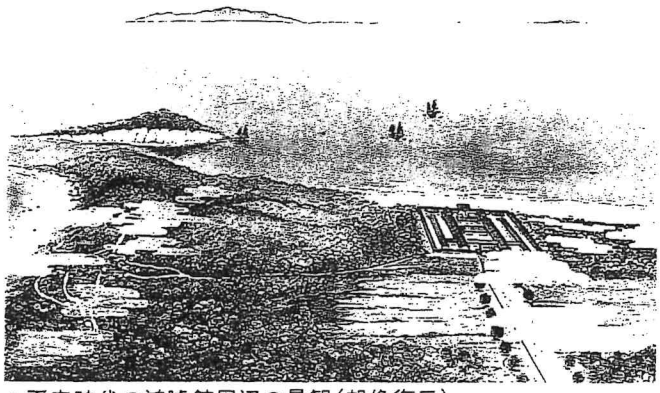


コーチ 15～16世紀にヨーロッパ人がアジアに進出するまで，南海貿易の利権を独占したのは，イラン・アラブ・インドのイスラム系商人である。

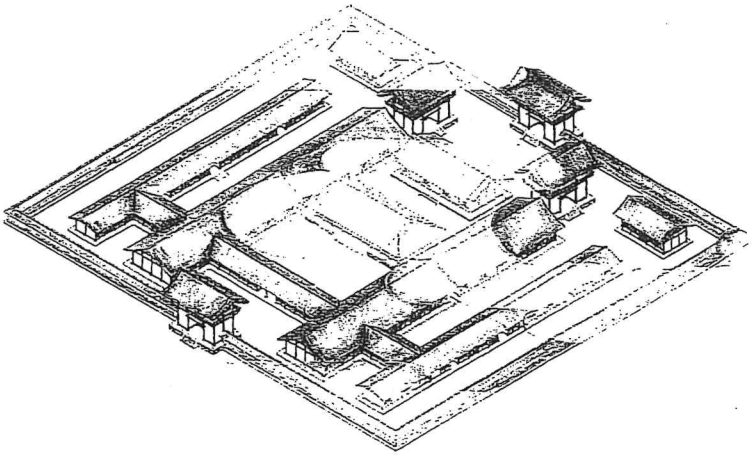
周船寺
鴻臚館
怡土城
三宅
大野城
小水城
水城
小水城
大宰府
基肄城
小水城
小郡遺跡

▲大宰府の関連施設

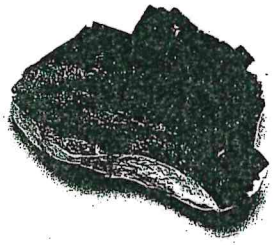
九州歴史資料館，1978『甦る遠の朝廷　大宰府展　発掘10周年記念』



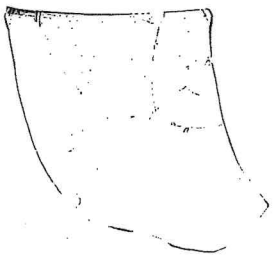
▲平安時代の鴻臚館周辺の景観（想像復元）



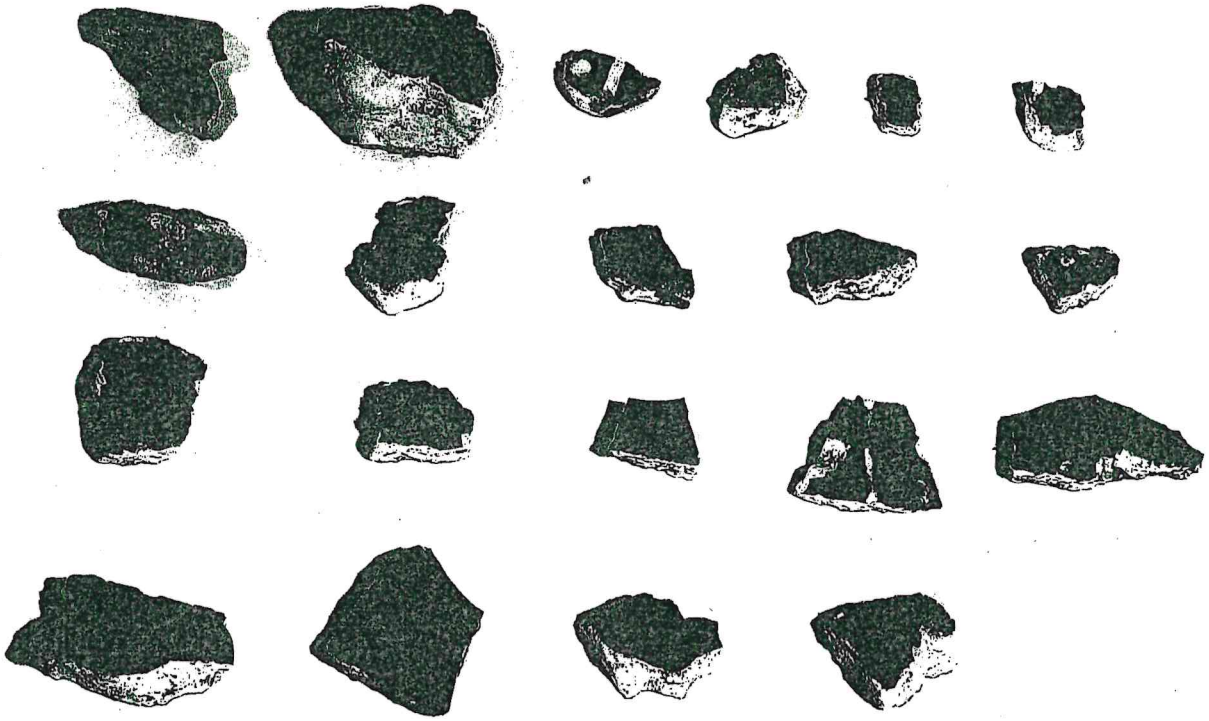
▲鴻臚館想像復元図　（澤村仁愛知瑞穂短期大学教授による）



44

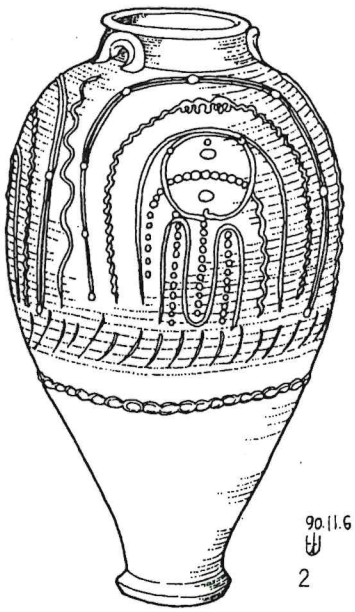


45



44

1

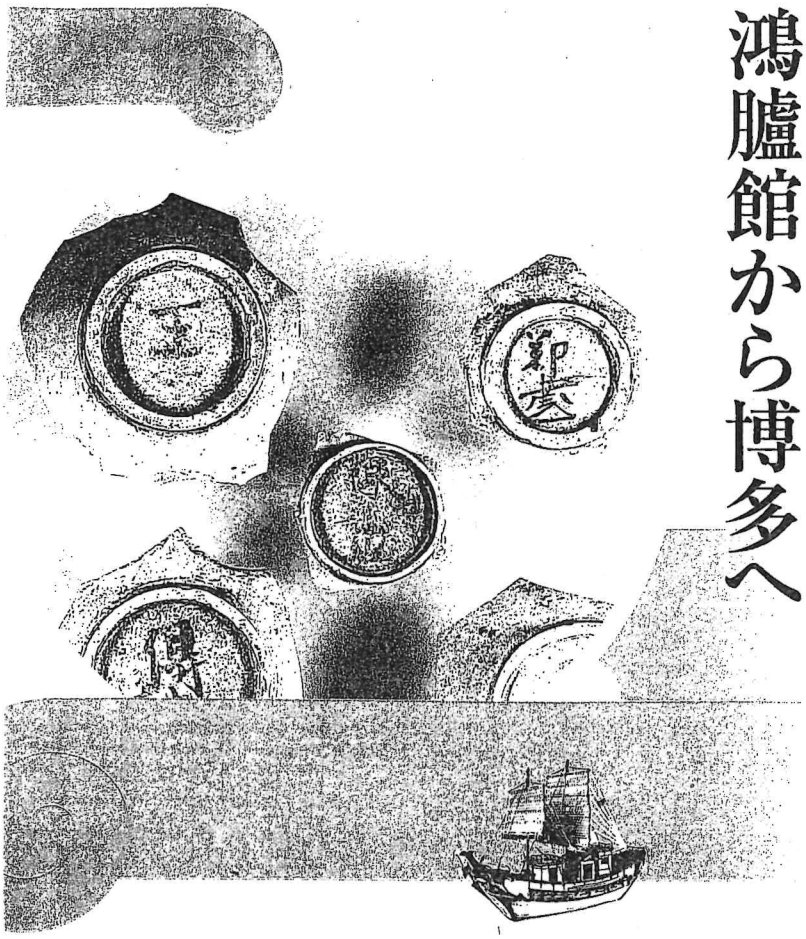


2

初期イスラム陶器大壷復原図（山本信夫 作画）

44－イスラム陶器／福岡市中央区鴻臚館跡
外面の青緑色で透明度の高いガラス質の釉と、明るい黄灰色で細かい穴の多い胎土が特徴的である。外面には線や円などの貼付文が装飾として施される。これまでに鴻臚館跡からは数十点のイスラム陶器の破片が出土している。

45－ガラス杯・瓶／福岡市中央区鴻臚館跡
イランやシリアなどで作られたイスラムガラスである。右は淡い青緑色のガラスで瓶の口縁部である。やや器壁は厚手であり、器形はまっすぐ延びた口頸部にふくらんだ胴の付くフラスコ形と思われる。左は無色のガラスで杯の口縁部である。器壁は1mm以下の薄手であり、器形は椀形もしくはワイングラス形になるとみられる。



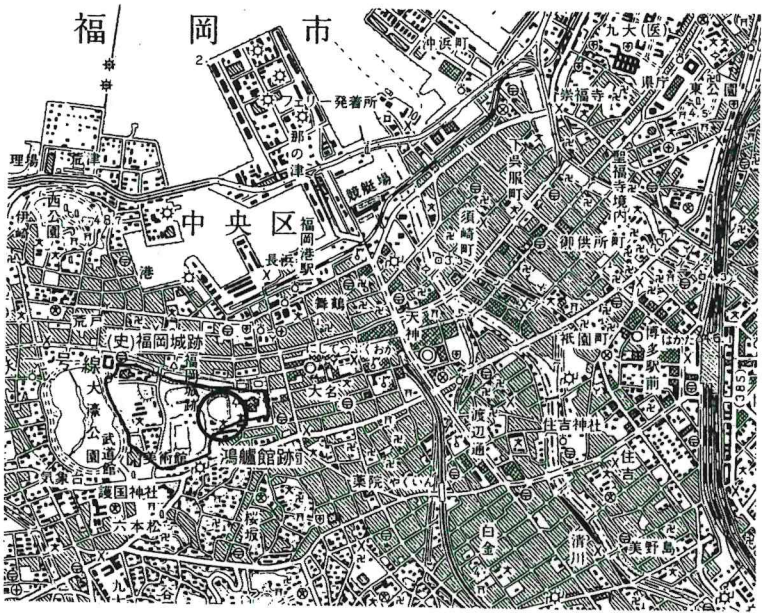
鴻臚館から博多へ

交易の施設の性格を強めた鴻臚館は、11世紀中頃を境にそこでの管理貿易は衰え、中国商人たちは鴻臚館の東に位置する博多に居住し、日中間で活発な貿易活動を展開する。博多には、中国商人たちにより「博多津唐房」「大唐街」とよばれる中国人居住区が形成された。博多は国際貿易都市として、中世を通じ活況を呈する。

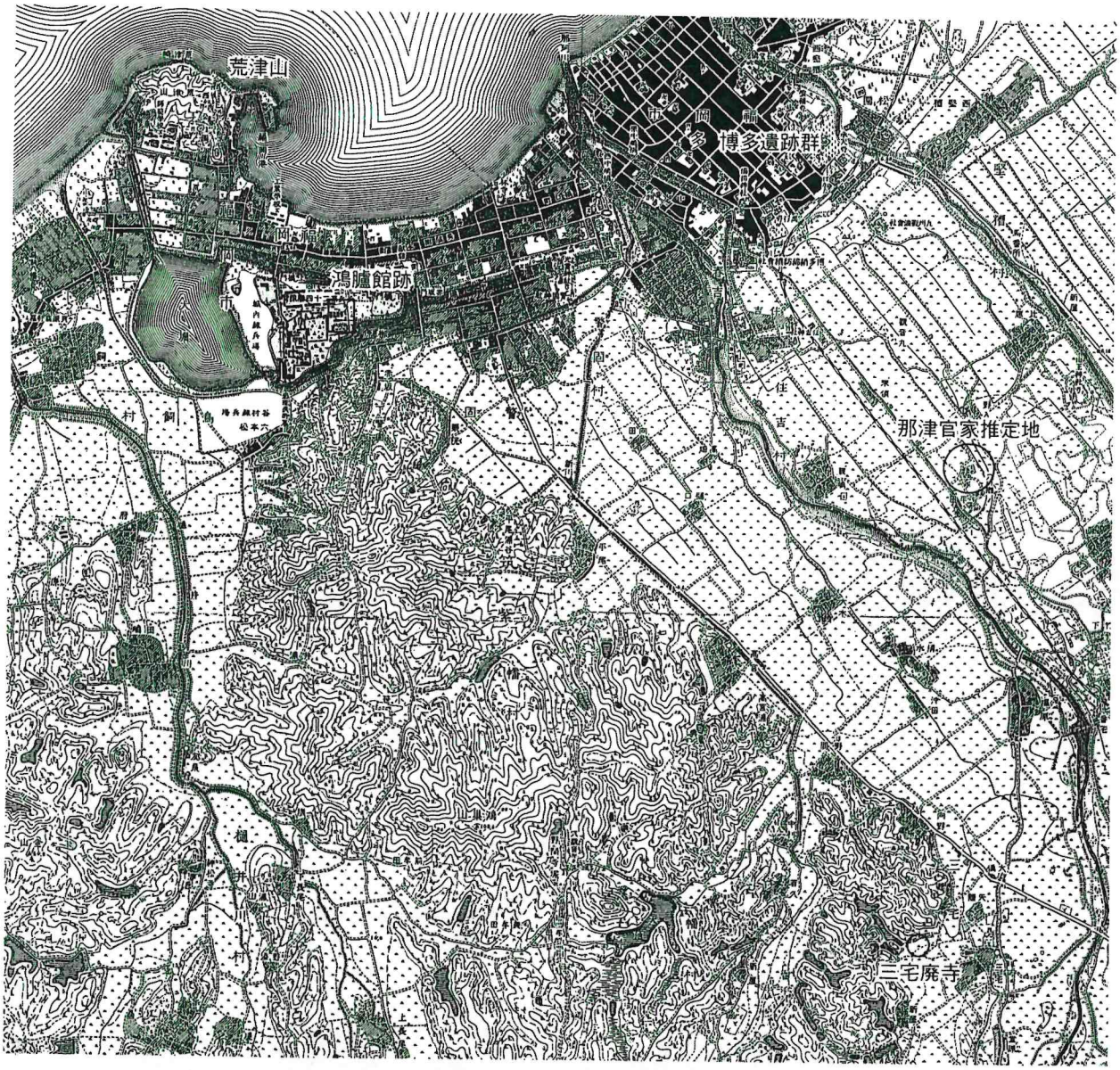
博多遺跡群出土品を中心として、鴻臚館の終焉と中世都市博多の成立を紹介する。

鴻臚館跡と博多遺跡群

天智朝は、664年福岡平野の最奥部を水城で画し、665年大野城・基肄城を築き、福岡平野の那津官家に置かれたと推測される筑紫大宰を移して大宰府を造営したと考えられている。この時期の大宰府の退転と海岸部の外交施設の造営とが無関係とは考えられないが、鴻臚館の前身である筑紫館の初見は、688年まで下る。鴻臚館の名称は、弘仁年間（810～824）に唐の外交を司る官署である「鴻臚寺」に倣って改称したものと考えられている。



鴻臚館跡位置図（1/25000）

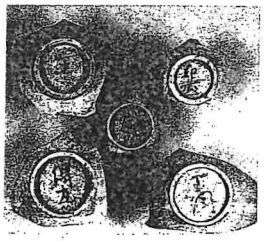


鴻臚館跡周辺地形図（明治33年、1/20000）アミは推定自然地形

福岡市教育委員会，2004『鴻臚館跡 14』『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第783集

440

441



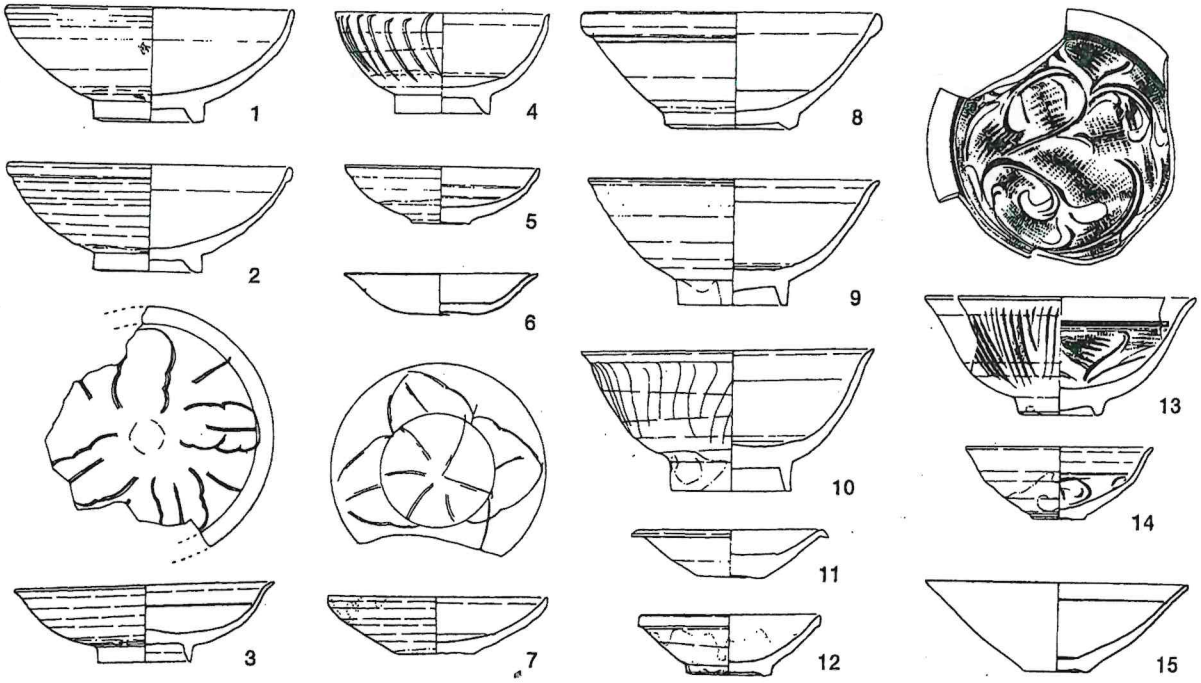
438

439

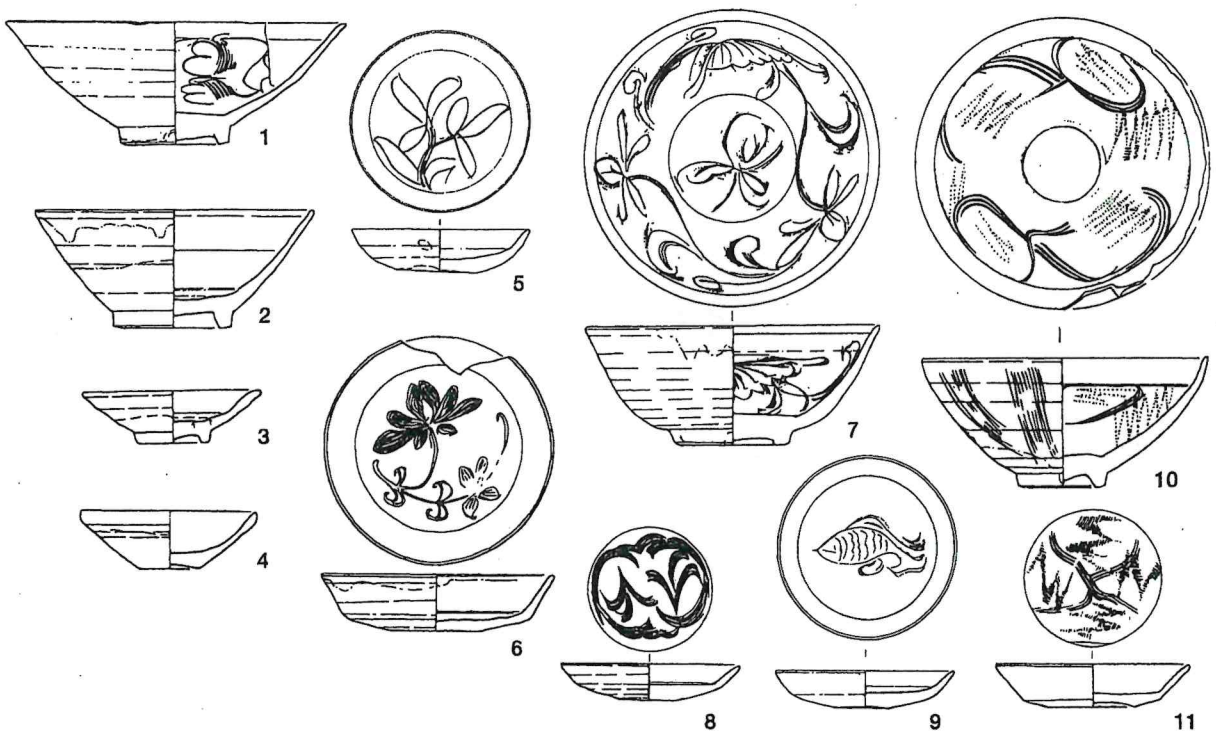
大量の中国陶磁器ー貿易都市·博多の誕生

鴻臚館時代の公貿易とは全く趣を異にした私貿易により、現在の貿易都市ー博多の基礎は作られた。発掘調査で、1ヶ所から大量の陶磁器が廃棄された状態で出土することがあり、それらは博多を通じて大量に持ち込まれた陶磁器の「氷山の一角」として理解できる。こうした博多の発展は鴻臚館という「下地」があって、はじめて成立し得たものであった。

438－墨書陶磁器／福岡市博多区博多遺跡群
439－博多遺跡群第56次調査SK-0281ー括遺物
福岡市博多区博多遺跡群
440－博多遺跡群第79次調査1827号遺構ー括遺物
福岡市博多区博多遺跡群
441－銭弘俶八万四千塔／誓願寺蔵［重文］
10世紀中頃、五代十国の一つ呉越国王銭弘俶がインド·マウリヤ朝のアショカ王の故事に倣い、八万四千の宝塔を作らせた。日本にももたらされ、西日本各地に伝わり出土している。越州窯青磁が生産されたのは呉越国の領域であり、銭氏一族が庇護し発展させたとされる。

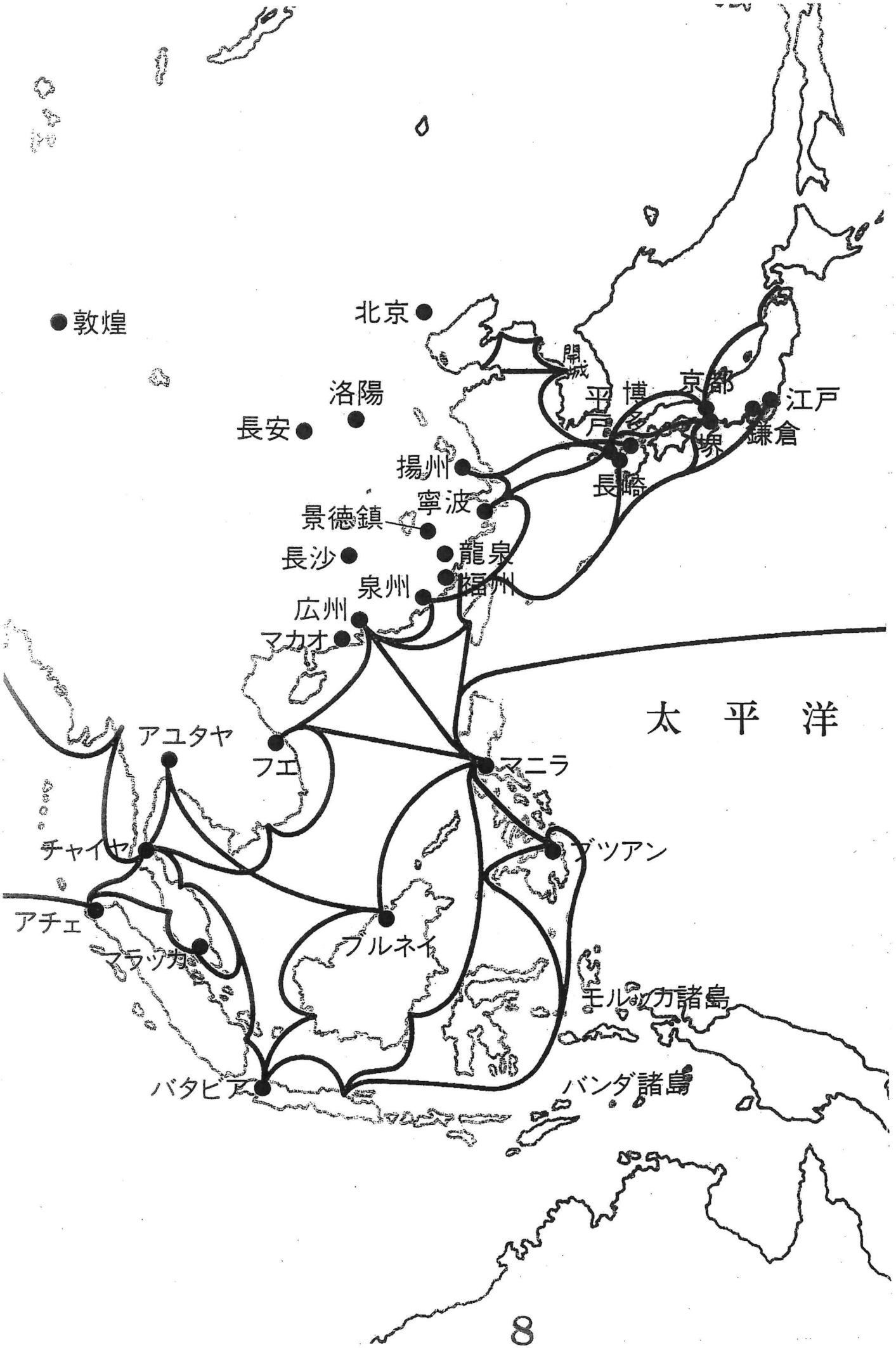


11世紀後半～12世紀前半の陶磁器(1/4)
1～7:白磁(広東省)　8～12:白磁(福建省)　13:青磁(龍泉・同安窯)　14:青磁(連江窯)　15:高麗青磁



12世紀後半の陶磁器(1/4)
1～6:白磁(福建省)　7～9:青磁(龍泉窯)　10・11青磁(同安窯)

田上勇一郎，2006「発掘調査からみた中世都市 博多」『市史研究 ふくおか』創刊号

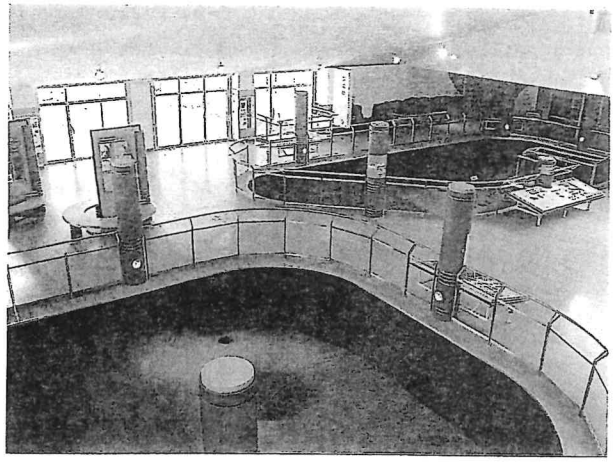

敦煌
北京
開城
洛陽
長安
平戸
博多
京都
江戸
堺
鎌倉
揚州
長崎
寧波
景徳鎮
長沙
龍泉
泉州
福州
広州
マカオ
太平洋
アユタヤ
フエ
マニラ
チャイヤ
ブツアン
アチェ
ブルネイ
マラッカ
モルッカ諸島
バタビア
バンダ諸島

発掘調査地点位置図（1／50,000）

1. 勝浦高原遺跡　2. 勝浦高堀遺跡　3. 在自西ノ後遺跡

4. 金刀比羅神社古宮遺跡　5. 宮司大ヒタイ遺跡

津屋崎町教育委員会，2002『津屋崎町内遺跡』『津屋崎町文化財調査報告書』第19集



唐坊（とうぼう）とは？

「唐」は中国、「坊」は区画を意味する言葉で、中国人の居住区という意味です。遣唐使廃止後の貿易形態は、鴻臚館（こうろかん）における国家の管理貿易でしたが、11世紀に入る頃から各地の有力貴族・寺社が自らの荘園内に宋の貿易船を招き入れるようになりました。そして綱首（ごうしゅ）と呼ばれる貿易商人達も、日本に滞在しながら貿易を行なうようになり、これによって形成された中国人街が「唐坊」でした。

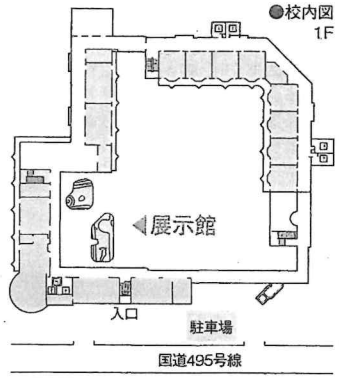
在自西ノ後遺跡は、多量の中国製陶磁器が出土しており、その陶磁器の中に「綱首」の存在をうかがわせる「綱」と書かれた青磁があります。それに加えて、隣に「唐坊地」という地名が残っていることから、貿易に深く関わった遺跡であろうと思われます。また文献資料においても、中世の宗像氏が宋の貿易商人と関係が深かったことが確認できます。

展示館では遺跡の内容だけでなく、当時の日本・アジアの情勢も含め津屋崎の歴史を紹介しています。さらに、在自西ノ後遺跡の解説を映像で行なうと同時に、本町で今尚受け継がれている津屋崎祇園山笠、盆踊り、御神幸祭も映像で紹介します。

津屋崎町は、古代は沖ノ島との関わりにおいて、中世は日宋貿易によって、近世は塩の生産地・積出港として栄えた、まさに海に開かれた町です。
また、その地理的環境によって、大陸との交流は古くから活発でした。

時代	年代	津屋崎・宗像のできごと
旧石器	19000年前	牟田池周辺（勝浦）で旧石器人が生活する（石器が出土）
縄文	4700年前	入り海が勝浦の西東地区まで広がっていた
弥生	2300年前	今川遺跡で青銅器が使用される（日本最古級）
	3世紀前半	前方後円墳が造られ始める（ヤマト王権による統一）
	4世紀	沖ノ島での祭祀が始まる
古墳	4世紀後半	日本最古の陶質土器（在自小田遺跡）が朝鮮半島より渡来
	5～6世紀	津屋崎古墳群が造られる
	7世紀	宗像君徳善の墳墓である宮地嶽古墳が造られる
	654年	宗像君徳善の娘　尼子娘が大海人皇子（後の天武天皇）に嫁ぎ高市皇子を産む
飛鳥	672年	壬申の乱　高市皇子が活躍する
	690年	高市皇子が太政大臣となる
奈良	729年	長屋王の変　高市皇子の息子である長屋王が失脚する
	8世紀	越州窯系青磁（在自下ノ原遺跡）が中国よりもたらされる
	894年	菅原道真の建議により遣唐使廃止
平安	960年	宋が中国を統一
	1186年	生家地区で源義経の妻の静御前が臼杵太郎を産む
	1187年	色定法師が一筆一切経の書き写しを始める
	1220年	宗像大宮司夫人張氏　阿弥陀経石に寄進文を刻む
	1231年	宗像家文書に唐坊八幡宮の名前が出てくる
鎌倉	1253年	宗像氏と三原氏が博多綱首謝国明の遺領小呂島をめぐって争う
	1274年	文永の役　蒙古軍が博多を攻める
		勝浦の新原地区に石塔が立てられ始める（新原百塔）
	1281年	弘安の役　蒙古軍が本町の在自潟・桂潟を攻め、宗像軍と戦う
安土・桃山	1600年	関ヶ原の戦い　同年黒田長政が筑前に入る
		この頃　黒田如水の弟の養心公が津屋崎に屋敷を構える
江戸	1668年	勝浦塩田が完成する
	1743年	津屋崎塩田が完成する

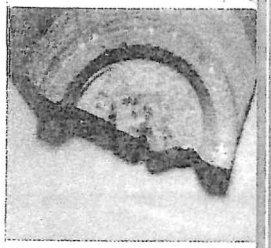
在自唐坊がにぎわう時期

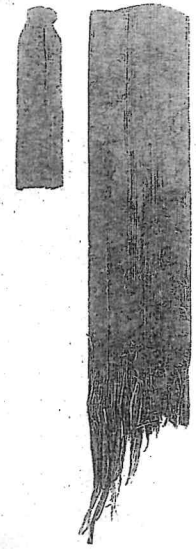


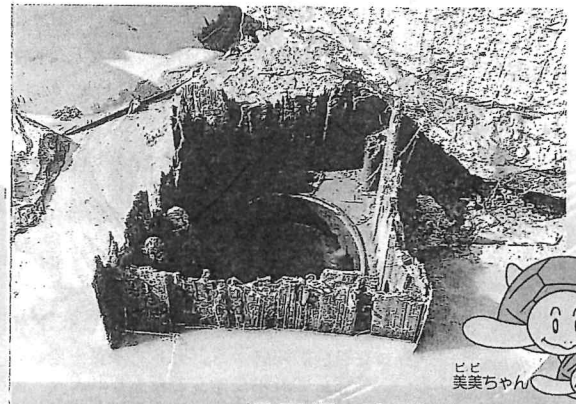
URL　http://www.town.tsuyazaki.fukuoka.jp/
e-mail　info@town.tsuyazaki.fukuoka.jp

在自唐坊跡展示館

あらじとうぼうあとてんじかん





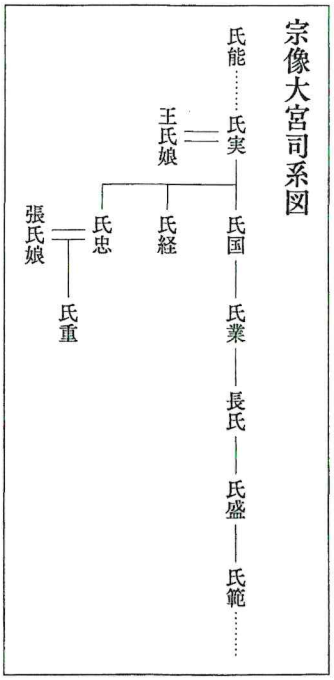


福岡県　津屋崎町

宗像大社の南宋交易

古代より玄界灘を航行する技術を身につけて海の道を往来していた宗像の人々は、ヤマト王権・大和朝廷の渡海に際して重要な役割を果たした。その後、朝廷が大宰府、博多の鴻臚館を窓口にして中国との交易を行っていた時代には、宗像の人々も同様に中国との貿易を行っていた。鎌倉時代には当時の南宋、室町時代には朝鮮半島に成立した朝鮮王朝と貿易を行い、海外交渉の歴史が継続した。特に鎌倉時代の南宋との交易は盛んであった。宗像大社の社僧色定は南宋商人張成がもたらした宋版一切経を底本とし、宋商人李栄から墨の寄進をうけて、一人で一切経の書写をし終えた。大宮司氏国が父氏実の供養のために南宋に発注した阿弥陀経石、宗像大社にゆかりのある藤原支房が南宋に求めて宗像大社に奉納した石造狛犬、これらの交易品は現在も宗像大社に所蔵されている。また、阿弥陀経石には阿弥陀仏・阿弥陀経が彫られた本体の左右側面に、渡来後に宗像で彫られた銘文がいくつかある。これらの銘文の内容から、氏実は宋商人王氏の娘を妻としてその息子が氏国であること、氏国の弟氏忠は宋商人張氏の娘を妻としたことがわかり、大宮司家は二世代にわたって宋人との婚姻関係を結んでいた。当時の博多は貿易港として繁栄し多くの中国人が居住していたが、宗像地方でも中国人住居跡が発掘されていて、物と人の交流が盛んであったことが裏付けられている。

（河窪）



阿弥陀経石（重要文化財）
高106.6cm　宗像大社

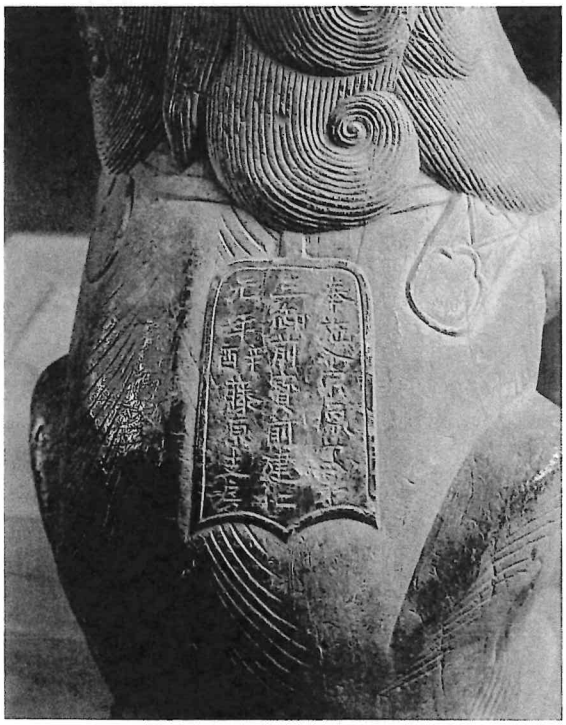
石造狛犬　一対

中国・南宋時代、建仁元年（一二〇一）奉納

〔阿形〕高六〇・〇㎝

〔吽形〕高六〇・三㎝

宗像大社



出光美術館、2014『宗像大社国宝展　神の島・沖ノ島と大社の神宝』出光美術館

色定法師の時代年表

一一二七（大治二年）　宋南遷する（南宋のはじまり）

一一五六（保元元年）　保元の乱おこる

一一五八（保元三年）　宗像大社の社僧兼祐の子として生まれる
平清盛、大宰大弐になる

一一五九（平治元年）　平治の乱おこる

一一六六（仁安元年）　平頼盛、大宰大弐に任命される

一一八五（文治元年）　壇ノ浦の戦い

一一八七（文治三年）　二十九歳のとき「一切経」の写経をはじめる

一一九二（建久三年）　源頼朝、征夷大将軍になる

一一九五（建久六年）　宗像大社所蔵の阿弥陀経石が南宋で製作される

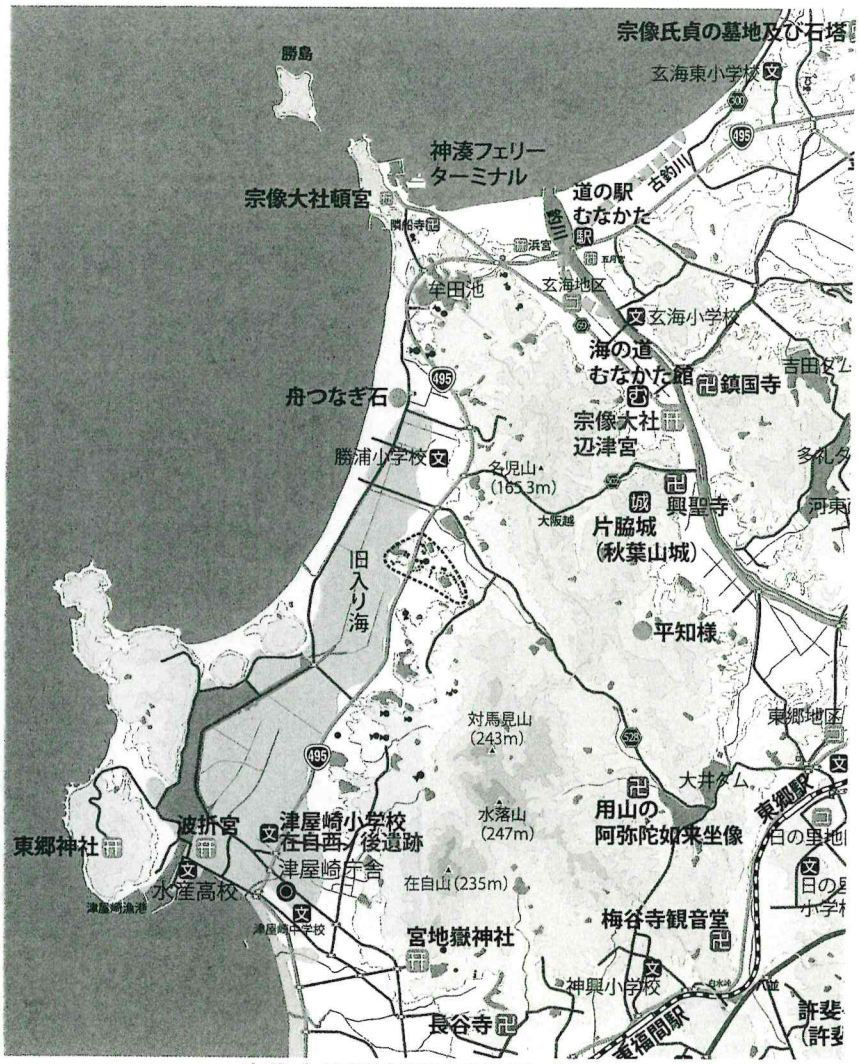
一二〇一（建仁元年）　藤原支房が石造狛犬を宗像大社に施入する

一二二〇（承久二年）　宗像大社所蔵の阿弥陀経石に大宮司氏忠の妻張氏らが追刻をおこなう

一二二一（承久三年）　承久の乱おこる

一二二八（嘉禄三年）　写経を完了する

一二四二（仁治三年）　八十四歳で入滅する



宗像大社辺津宮周辺地図（S=1/50,000）

仁治三年（一二四二）十一月六日　宗像第一宮座主

色定法師（祐良）寂す

〔色定法師木像〕○筑前興聖寺安置

（背銘）
大日本國鎮西筑前州宗像第一宮座主色定大法師

一切經律論一筆書寫行人

仁治二年辛丑、十二月九日刻之、勸進僧榮範、（仁治三年）次年十

一月初六日、甲申、巳剋入滅畢、

文治三年（一一八七）四月十一日　色定法師、一筆一切経大方広仏華厳経の書写を、宗像西経所にて始める

〔色定法師一筆一切経大方広仏華厳経第一奥書〕

文治三年丁未四月十一日壬午書終日十六日辰時書畢

宗像　西経所書之　一切経一筆書写行僧良祐之

文治四年（一一八八）十二月十二日　色定法師、綱首張成・李栄の助成をうけ、一筆一切経五部大般若経書写を終わる

〔色定法師一筆一切経大般若経奥書〕

○梶原善大夫「田島石経記附言」所収

五部大乗経、華厳、大品、大集、法華、涅槃経、已上一百九十巻、十九秩、始自文治三年丁未四月十一日壬午卯時終至于文治四年（一一八八）戊申十二月十二日癸酉酉時、書写畢、経主綱首張成、墨檀越綱首李栄、始自関白殿下終至于人民百姓等、殊分別當社本家預所宮司宗像朝臣氏實、幷妻子惣神冠（ママ）僧冠（ママ）貫首祢宜預参議諸卿文武百寮　各願円満、別父母姉弟、別三人同行僧心昭、料紙勧進僧西観、一切経一筆書写行人僧良祐、各為現世安穏後生菩提也、殊別過去尊霊師匠學頭良印、先祖祖父祖母四人、幷六郎從黒法師丸同年死、惣一切衆生、父母兄弟祖父祖母為往生、極楽證大菩提書写如件、（上下略）

安貞元年（一二二七）三月二日　色定法師、宗像社に施入する一筆一切経の五部大乗経等を書写し終える

〔色定法師一筆一切経大般涅槃経奥書〕

第九號盈帙ニ　七十九巻

一大般涅槃経

（中略）

文治四年戊申、十二月八日（脱アラン）時書之、一切経一筆書寫行人僧良祐

（四十奥書）宗像大宮可奉施入五部大乗経華厳経五十巻、大集経三十巻、此内日藏経十巻、月藏経十、〔巻脱カ〕地藏十輪〔経脱カ〕十巻、合六十巻、大品般若経三十巻、法華経幷開経六十巻、涅槃経四十巻、合一（マヽ）百九十二（ヽ）巻、願主堂達兼執行宗盛大法師

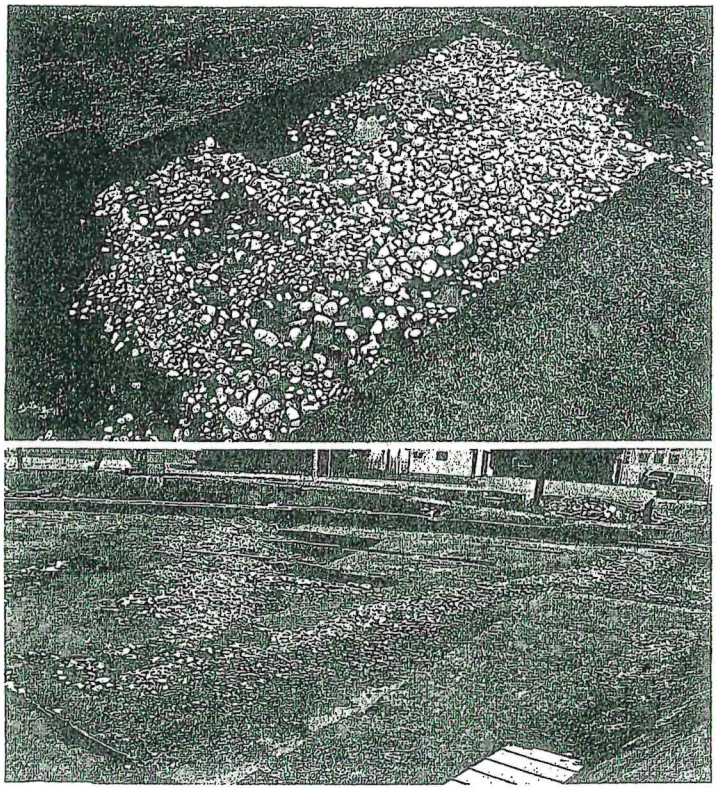
始自嘉祿元年歳次乙酉、九月十五日、終至于同三年歳次丁辰〔亥〕、三月二日、彼岸第二日次辛〔亥脱カ〕、以申尅書寫畢、

是即妻妾平比丘尼羅阿彌陀佛為成佛得道之書、〔之脱カ下同ジ〕

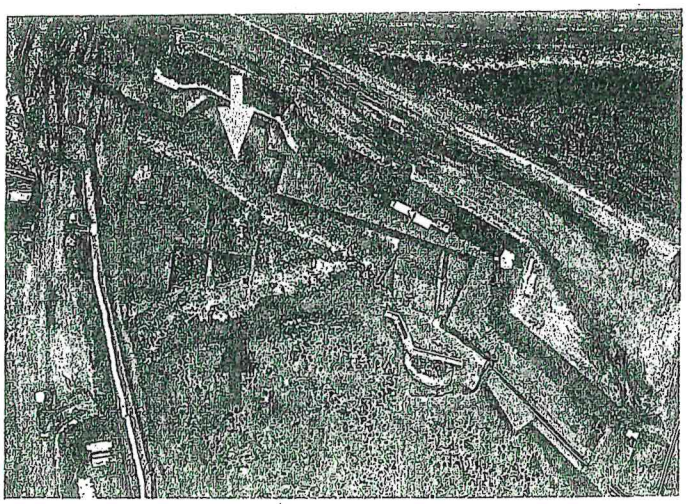
執筆一切経自筆書寫比丘色定書之、

枚數三千七百二十三筆、

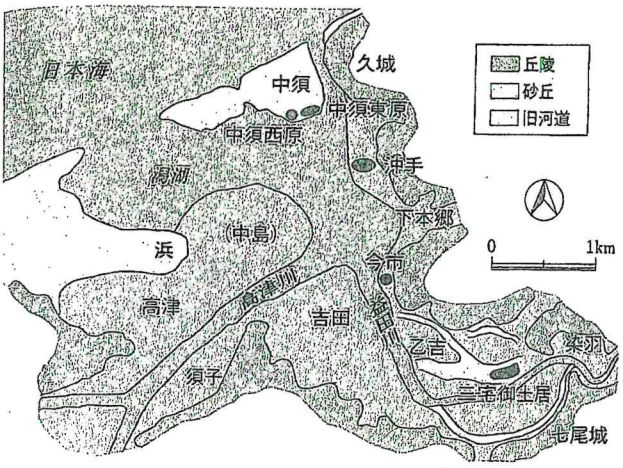
宗像市史編纂委員会，1995『宗像市史』史料編　第1巻　古代・中世Ⅰ，宗像市



礫敷き（上：中須東原遺跡、下：中須西原遺跡） ともに15世紀の遺構です。礫の大きさは5センチから20センチ前後までとさまざまですが、潟湖に面した汀線沿いで発見され、外洋船から小舟に積み替えた荷物の積み降ろしを行う船着き、荷揚げ場であったと考えられます。



中須西原遺跡全景（北から） 矢印が船着き場の礫敷きです。赤の矢印の位置に築かれたものが、河道の変化で黄色の矢印の位置に変わりました。



※交易で蓄財、荘官から戦国武将へ

沖手遺跡・中須西原・中須東原遺跡のあった益田荘は、平安時代末期、石見国庁の役人であった藤原氏が益田平野とその周辺部の開発を進め、摂関家に寄進して荘園となったものです。荘官に任じられた藤原氏は益田氏を称するようになり、鎌倉時代末期以降、益田本郷を本拠として石見国有数の武士団として地位を高め、南北朝時代以降、大内氏、さらにその滅亡後は毛利氏に従い、関ヶ原の戦い後には長門国阿武郡須佐に本拠を移して、幕末まで萩藩毛利家の国家老を務めました。

戦国時代の益田氏は、博多の一部や萩沖の見島といった海洋貿易の拠点を領有する海洋領主としての性格も持ち合わせていました。積極的な交易によって築き上げられた強固な経済基盤が室町幕府や大内氏、毛利氏に対する地位を高めたと考えられます。

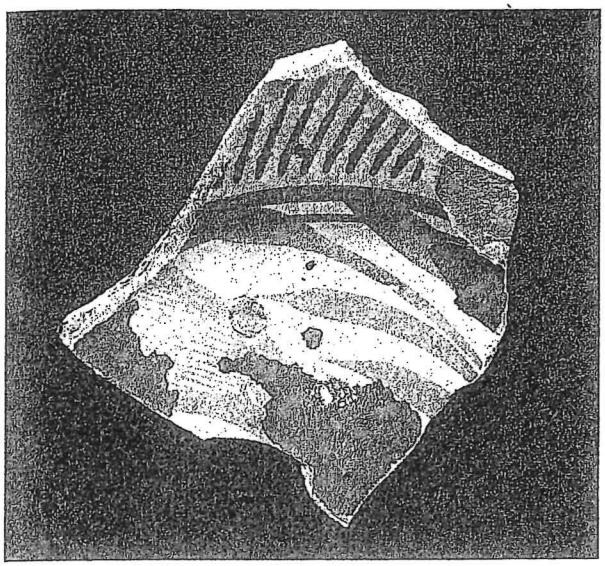
水墨画を大成した雪舟筆益田兼堯像（重要文化財）が残され、また八〇〇点に及ぶ中世文書を含む益田家文書が東京大学史料編纂所に所蔵されています。（木原 光）

▲現在の益田平野

◀雪舟筆益田兼堯像（重要文化財、益田市立雪舟の郷記念館蔵） 文明11年（1479）の竹心周鼎による賛があります。紙本着色 82.8×40.9センチ。

〈おもな遺物〉 沖手遺跡・中須遺跡

島根県益田市

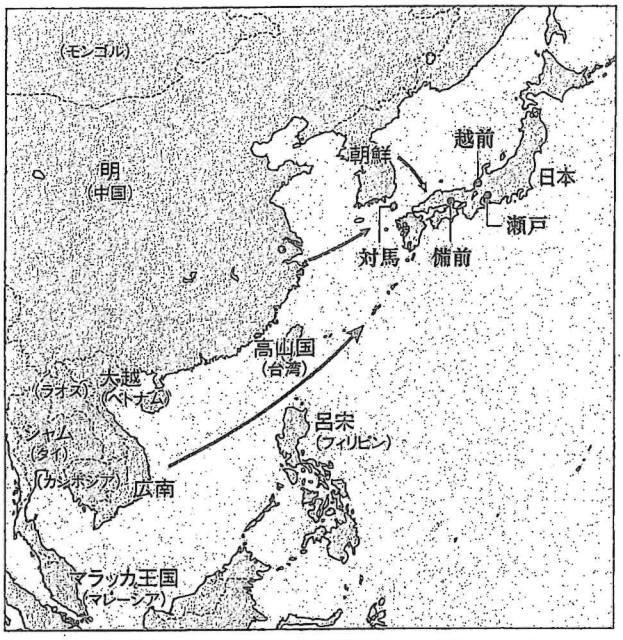


鉄絵瑠璃釉大鉢

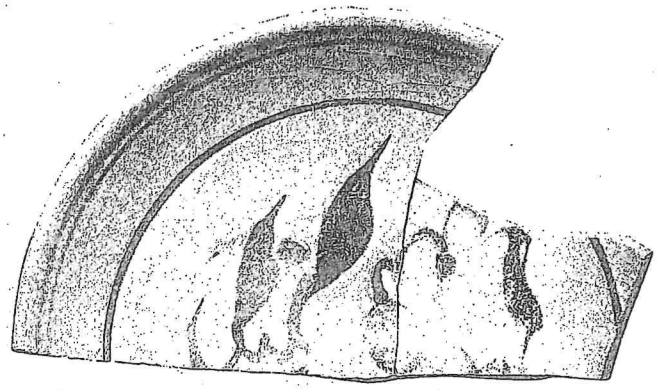
鎌倉時代　13世紀後半～14世紀

底径22.0センチ

元時代の磁州窯系（中国河北省）の陶器で、素地に白化粧を施し、体部内面には斜め方向に簾状文が、底部内面には魚藻文と思われる文様が淡い灰色で描かれ、鮮やかなコバルトブルーの瑠璃釉が部分的に重なって残っています。瑠璃釉を施した鉄絵大鉢の出土は全国でもごくわずかです。



遺物から見た中世後半の沖手遺跡・中須遺跡の交易範囲　遺物にはベトナム、元、朝鮮でつくられた陶器・磁器が多数含まれていました。地理的環境にも恵まれて、山陰各地や国内遠隔地はもとより中国、朝鮮、さらに対馬を経て東シナ海にも通じていたことが近年の調査で明らかになりつつあります。

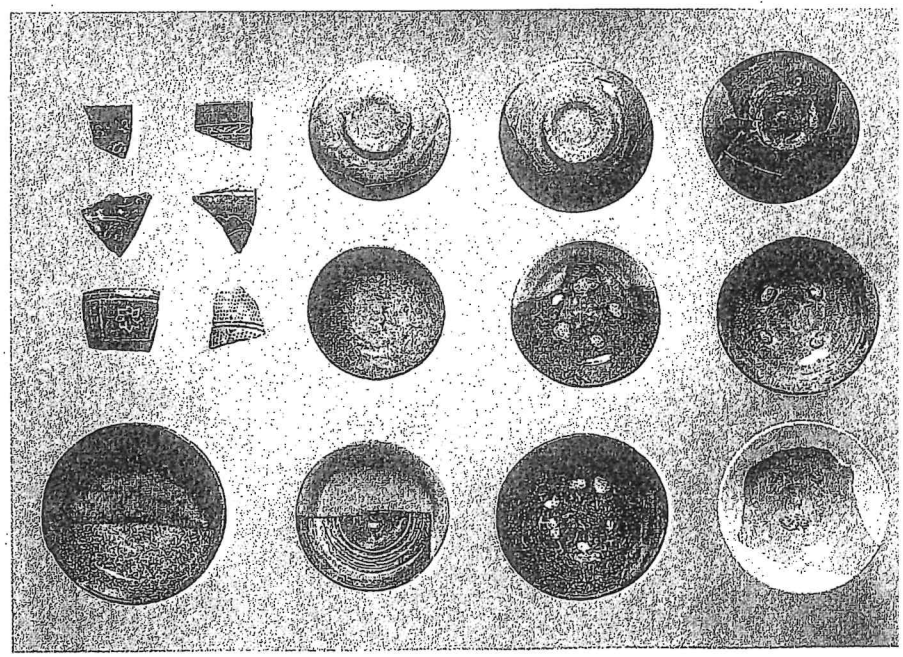


ベトナム鉄絵皿

室町時代　14～15世紀

高さ2.0センチ、口径13.0センチ

鉄分を含む顔料で、口縁内側に2本、内面底部に1本の条線をめぐらせ、器の内側（見込み）に草花文を描いた皿です。同種のものは対馬、博多、堺の遺跡から出土しています。中須西原遺跡では、数個体分のベトナム陶器の破片が出土しています。倭寇も介在した東アジア規模の交易ネットワークによって搬入されたもので、海洋領主だった益田氏の姿をほうふつとさせます。



朝鮮陶磁

室町時代　14世紀後半～16世紀

口径10.0～12.0センチ

象嵌青磁、白磁、粗製の施釉陶器など朝鮮陶磁が数多く出土していますが、その大半を占めるのが施釉陶器です。破片数の集計では、産地不明を除く貿易陶磁のうち、朝鮮陶磁が約20パーセントを占め、山陰の中世遺跡の中でもきわだって高い比率を示しています。益田氏が朝鮮との交易ルートを獲得していただけでなく、直接通交を行なっていた可能性も考えられます。

文化庁，2010『発掘された日本列島 2010 新発見考古速報』朝日新聞出版

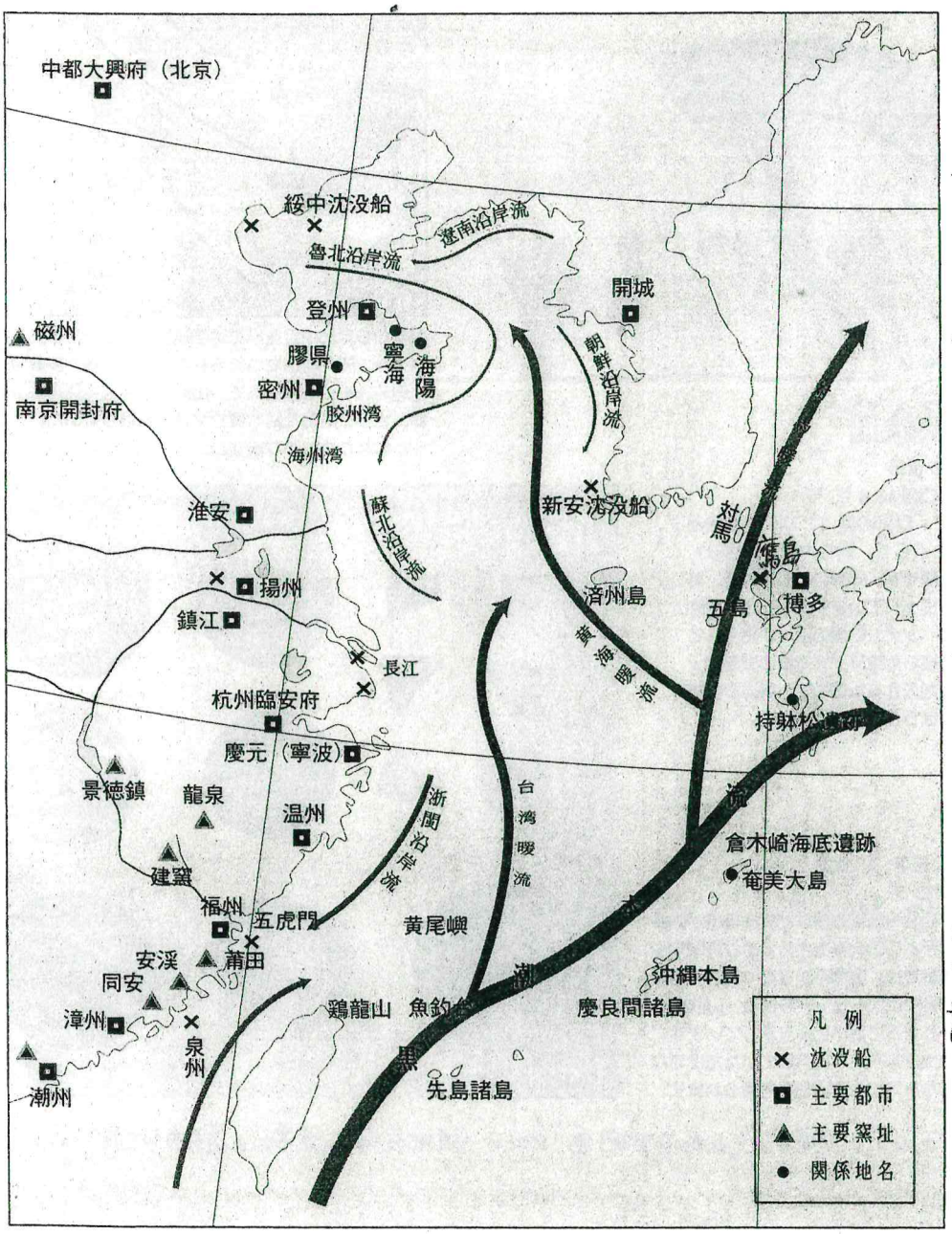
海流と航路、港

東シナ海の海流は、渤海と黄海を含むひとつの環流運動として把握できる。その主流は“北赤道流”の北上する支流“黒潮”であり、その支流“対馬暖流”や“黄海暖流”が分岐する。これら黒潮の主・支流は恒常的に流れており、東シナ海における平均流量は約35×106m³／秒で、これは長江の1000倍にあたるという。これに対して、東シナ海の海流には“沿岸流”があって環流運動を形成する。

遣唐使船のコースとされる“南島路”は、奄美大島付近から東シナ海を横切って、浙江省明州（寧波）にいたる。季節風にかかわらず常に海流を横切って進むことになり、きわめて不合理な航路といえる。ましてや遣唐使船は船底が平らな、四辺に舟板を立てた箱形であった。風波に遭えばひとたまりもない非構造船なので、遭難の確率はきわめて高かった。

海流の摂理に則った東シナ海の伝統的航路は、必然的に次の3航路であった。第1は、山東半島と朝鮮半島を結ぶもので、遼南沿岸流や魯北沿岸流を利用、あるいは季節風に乗って往来した。第2は、黄海の周囲に沿う形の環流運動の南側が、長江河口付近から浙江と朝鮮半島南部方向に流れているのを利用し、季節風の力も加えて往来する。第3は、琉球弧を経由して福建省と九州を往来するコースである。北上は黒潮と夏の季節風に、南下は冬の季節風に乗って琉球にいたる。さらに季節風で黒潮を横切り、浙閩沿岸流によって福建に航海した。

こうした自然地理的条件のもと、東アジアの中世海道が営まれたのである。　（金沢　陽）



国立歴史民俗博物館、二〇〇五『東アジア中世海道　海商・港・沈没船』

청자음각모란당초문화병(青磁陰刻牡丹唐草文花甁)
높이 : 46.1cm, 구경 : 20.1cm, 저경 : 21cm
Celadon Vase

청자호문호(青磁鎬文壺) 중국 원(元)
높이 15.0cm, 구경 15.5cm, 저경 12.2cm
Celadon Covered Jar

タイムカプセル新安沈没船

Shinan Ship as Time Capsule

日元貿易の実像を保存したタイムカプセルが、朝鮮半島西南部の道徳島沖で発見された新安沈没船である。9年間の調査で大量の積み荷と船体が引き揚げられた。それは単なる「宝物」の引き揚げではなく、その後の水中考古学のモデルとなり、貿易や交流、陶磁器研究にとどまらず、東アジアの中世史を解明する不可欠の資料となった。大きな理由は、船体が保存され、2万点を越す陶磁器や、28ｔの銅銭、紫檀材、錫のインゴットなど主要な積み荷が残り、荷札が多数発見されたことである。

この船は、荷札などから、至治3年（1323）6月3日以降に中国の浙江省慶元（寧波）を出航し、博多へ向かった。しかし、途中東シナ海で遭難し、耽羅海道を流され、沈没した。船は長さ約30m、幅約9mで、およそ200ｔである。中央と前方にマストをそなえ、船底は竜骨をもつＶ字形で、鎧張りと呼ばれる外壁をもつ外洋船である。船内は、隔壁によって7～8室の船倉に分かれている。船の構造や、中国南部特産の船材が一部に使われていることから、中国で建造された船と推定される。

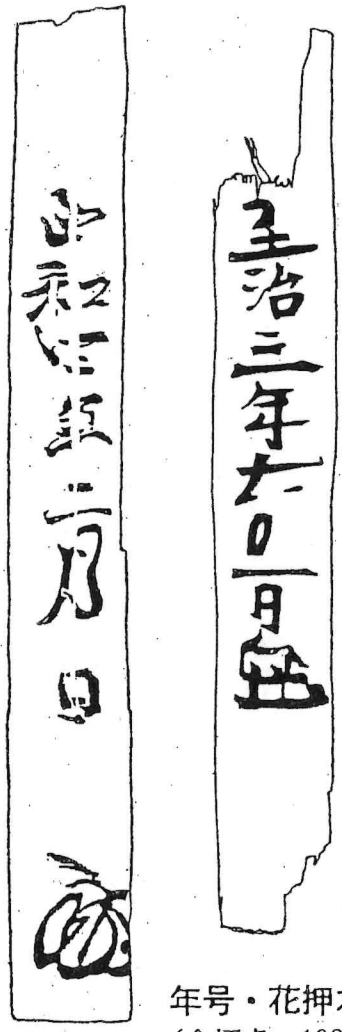
当時の文献史料などから、このクラスの船には60名ほどの乗員が乗っていたと考えられる。引き揚げられた遺物には、商品ではなく船員や商人の持ち物と推定される品々が含まれていた。例えば将棋駒、下駄、日本刀の鍔、和鏡、日本産火鉢、漆椀、瀬戸産瓶子など日本人特有の品にまじって、中華鍋や高麗の匙などもあり、国際色豊かな乗員がいたと思われる。

（小野正敏）

引き揚げられた新安沈没船　韓国国立海洋遺物展示館蔵

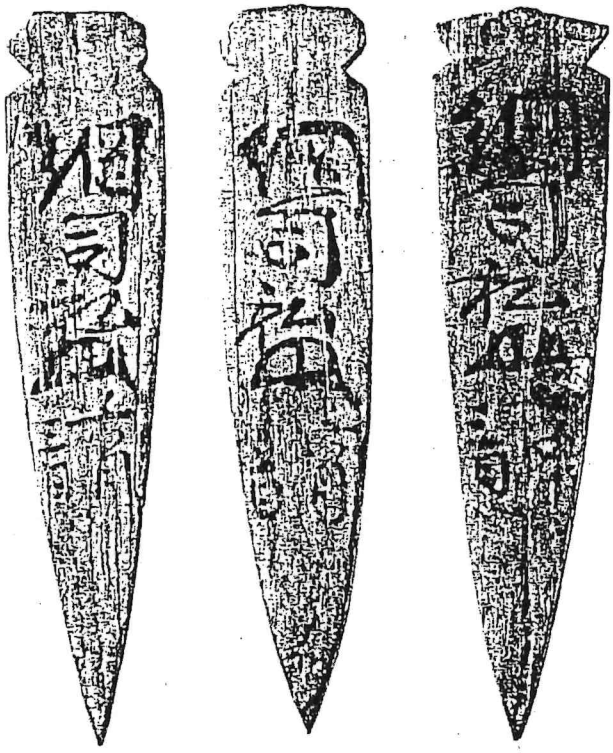
新安海底遺物年次別引揚現況

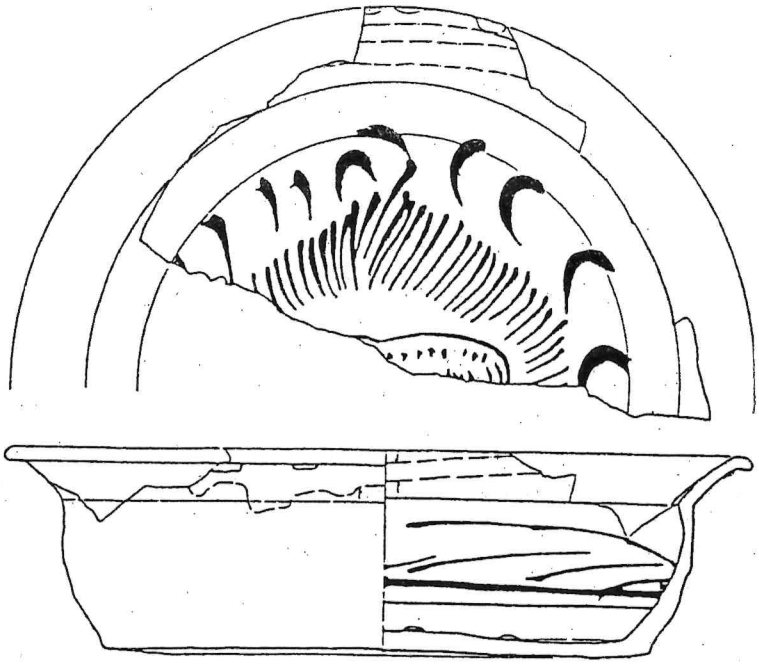
區分	年度	種類別								(點)	銅錢	(本)	(片)
		青磁	白磁	黑釉	雜釉	白濁釉	金屬	石材	其他	計		紫檀木	船體片
第1次	1976.10.26 ~11.2	52	20	2	23				15	112			
第2次	1976.11.9 ~12.1	1,201	421	54	9	18	12		169	1,884			
第3次	1977.6.27 ~7.31	19,00	1,866	54	604	74	264	4	138	4,906			
第4次	1978.6.16 ~8.15	2,787	1,289	96	623	63	86	11	91	5,046			
第5次	1979.9.1 ~7.20	76	21	29	101		6			233		303	
第6次	1980.6.5 ~8.4	1,112	200	30	66	2	31	2	18	1,461		20	8
第7次	1981.6.23 ~8.22	1,528	668	63	443	17	105	5	35	2,564	1차 ~7차 3톤	3	18
第8次	1982.5.5 ~9.30	983	328	41	220	6	109	9	45	1,741	18톤	452	176
第9次	1983.5.29 ~11.25	1,013	307	61	467	3	102	6	47	2,006	7톤	334	239
第10次	1984.6.1 ~8.17	1,669	178	72	48	4	14	6	16	2,007	18kg	4	3
最終確認	1984.9.13 ~9.17	38	5	2	1	1				47		1	1
計		12,359	5,303	506	2,305	188	729	43	574	22,007	28톤 18kg	1,017	445



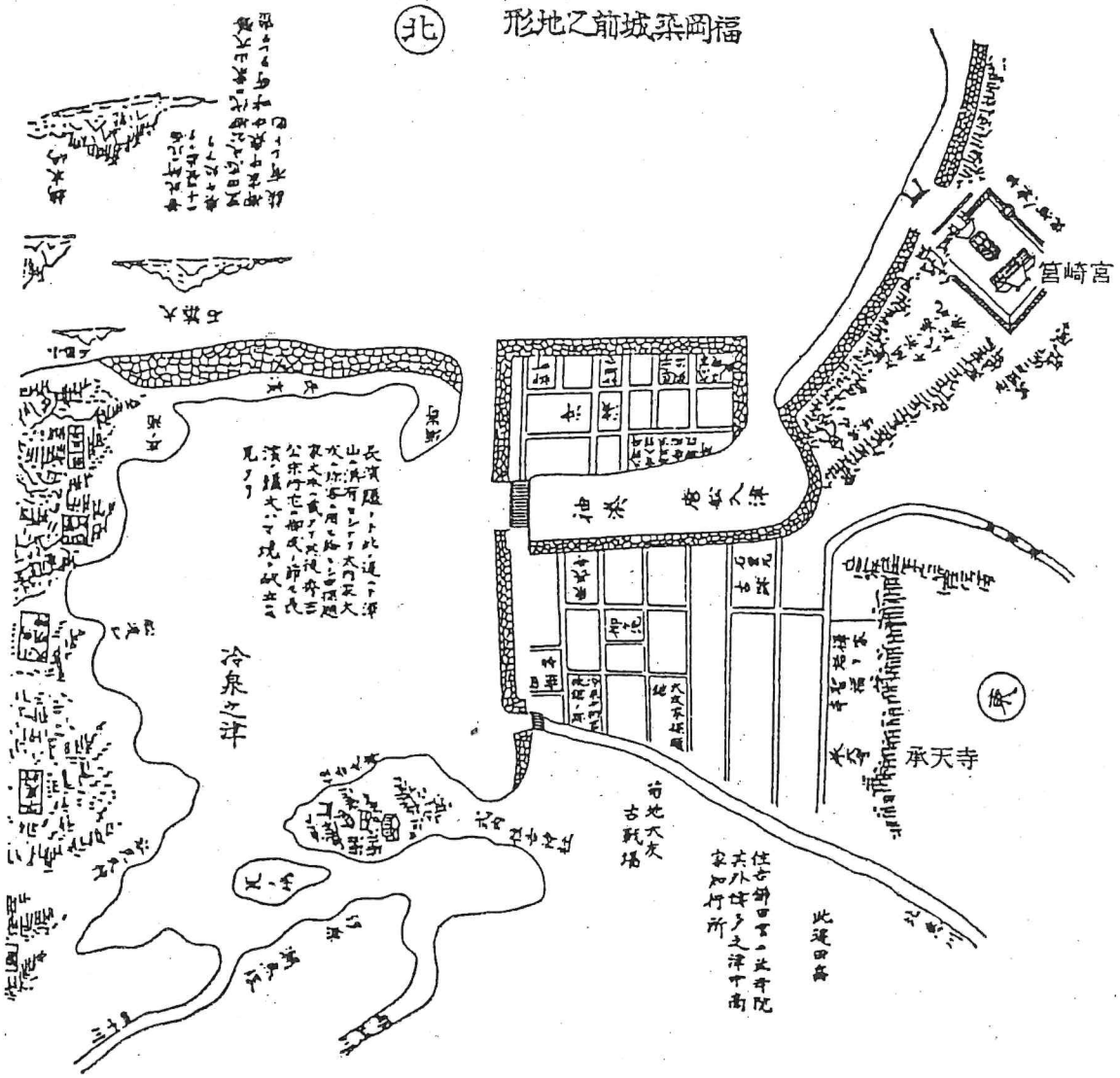
日本・大庭北出土

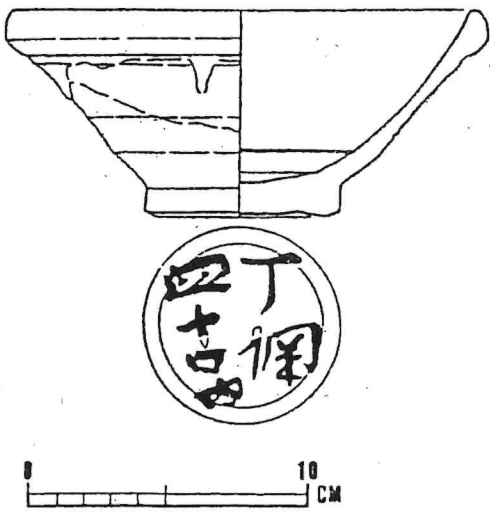
年号・花押木簡
（金炳虎，1984および朝日新聞，1984・2・4による）



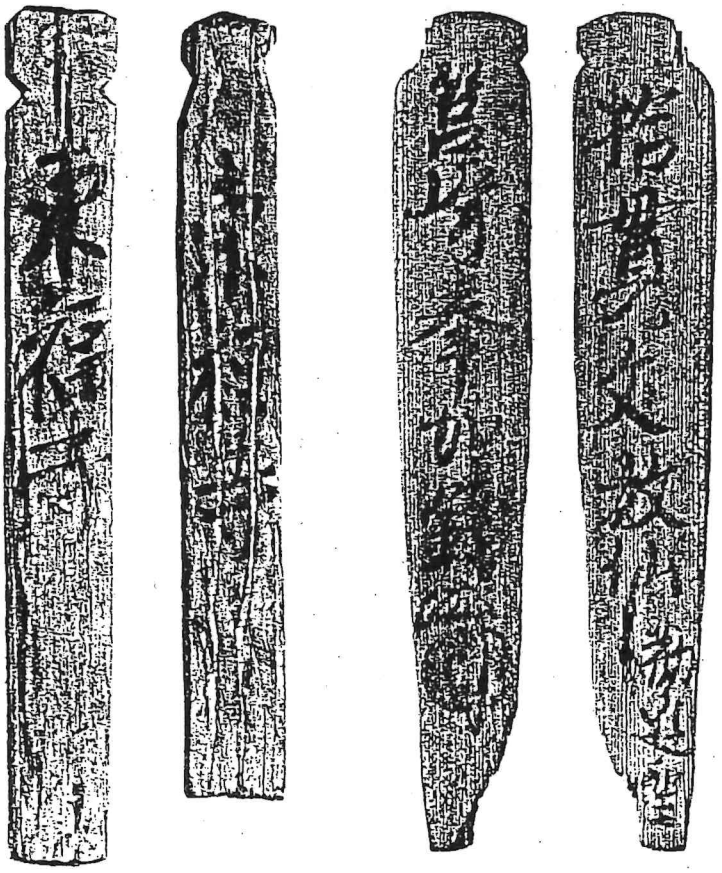


日本・博多出土





「丁綱」銘白磁碗（福岡市教育委員会，1981による）（池崎譲二氏ほか原図）



そう かもん おうあつもんかわら のきまる のきひら まる ひら
草花文、押圧文瓦(軒丸、軒平、丸、平)

平安〜鎌倉時代(12-13世紀)
福岡市埋蔵文化財センター蔵

博多遺跡群内でも限られた範囲でしか出土しない特殊な瓦である。草花文の軒丸瓦やフリルがついたような軒平瓦は国内では見られず、中国の影響であると考えられている。瓦はその重さにより建物を上から押さえ、建物自体を風雨から守るものである。よって小型の建物には適さず、その荷重に耐えられるような太い建築材で設計される、寺院や官衙などの大型建物にのみ使用される。つまり中世の博多に、町の中枢となったであろう中国風の大型建物が建っていたのである。(加藤)

ちゅうごくしきゆいおけ い どわく かしい いせき
中国式結桶の井戸枠(香椎B遺跡)

鎌倉時代(13世紀)
福岡市埋蔵文化財センター蔵

結桶(ゆいおけ)は縦板を筒状に連ねたものを竹のタガで留めたもので、中国が起源である。大型で耐久性に優れ、容器として持ち込まれたものを井戸枠に再利用したのであろう。砂丘上につくられた博多の町では、井戸を幾度も掘りかえさなくてはならず、底のない桶を逆さに積み重ねて井戸枠をつくりあげる方法は、簡単で効率的であったのであろう。後には井戸枠専用の桶もつくられ、博多から国内の各地域に広がっていった。(加藤)

福岡市博物館,2003『チャイナタウン展 もうひとつの日本史―博多 那覇 長崎 横浜 神戸

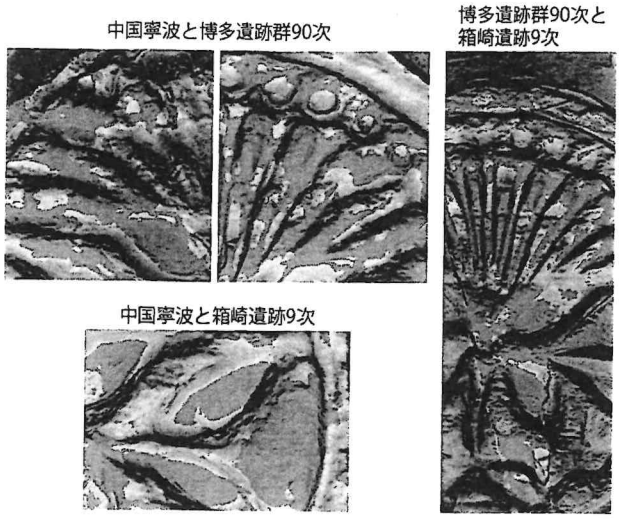


図 4　三次元データの重ね合わせ（偏差表示）

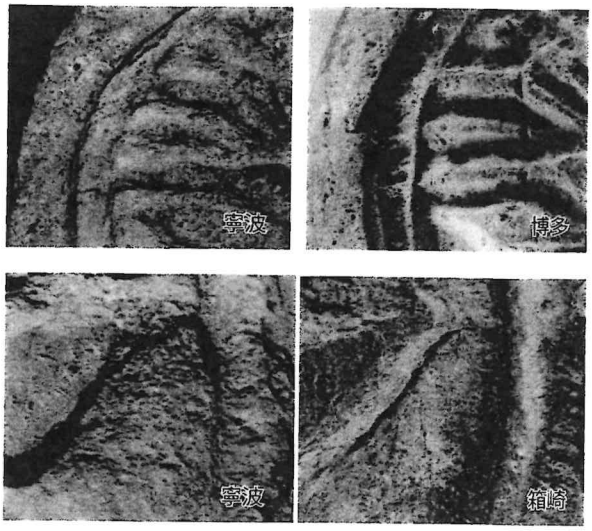


図 5　中国系瓦の写真による細部比較
上：寧波と博多 90 次の比較　下：寧波と箱崎 9 次の比較

図 6　三次元計測画像の重ね合わせによる比較

中園 聡 ほか，2015「超・遠隔地交渉における同笵関係の検討 ―中国と日本出土の中世中国系瓦―」『日本情報考古学会講演論文集』Vol. 15（通巻35号）

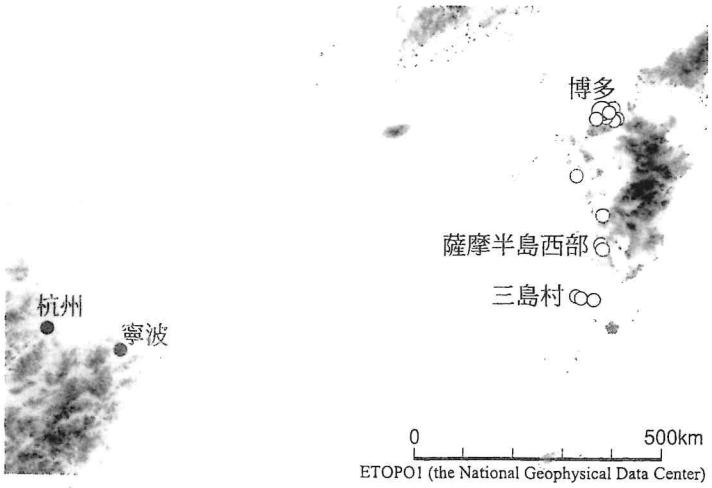


図 1　日本の中国系瓦発見遺跡と中国の関連都市の位置

中園 聡，2017「九州出土の中世中国系瓦の三次元記録と検討」『季刊考古学』第140号，雄山閣